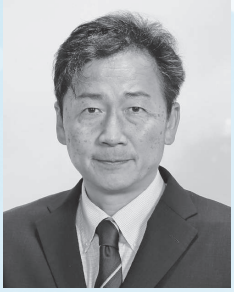
福井県小学校長会

會報

2022年度
No.116

発行日：令和５年１月 10 日
発　行：福井県小学校長会
編　集：県小学校長会編集広報委員会
印刷所：株式会社宮本印刷

これからの時代、校長に求められるものは？



福井県小学校長会
会長　北　和　幸

「いじめ・不登校などの生徒指導上の課題への対応や貧困・虐待などの課題を抱えた家庭の児童生徒等への対応、インクルーシブ教育システムの理念を踏まえた発達障害のある児童生徒等を含む特別な支援を必要とする児童生徒等への対応、外国人児童生徒等への対応、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実と主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善、道徳教育の充実、小学校における外国語教育、一人一台端末環境を前提としたICT･教育データの利活用、STEAM教育等の教科等横断的な学習の推進、キャリア教育への対応、学校安全の対応、園小接続・小中一貫教育等の学校段階間連携等への対応、保護者や地域との連携・協働体制の構築などの状況に対応できる教員等の資質の向上」文科省が公表した「公立の小学校等の校長及び教員としての資質の向上に関する指標の策定に関する指針」の改正案で示された、これからの時代に求められる教師像です。

まさにスーパーマンを求めています。自分自身に置き換えてみても、どれだけの項目をクリアできているのか、甚だ疑問です。ですから、現実的には自らを客観視し、優先順位をつけながら研修などを通して教員としての資質を少しずつ向上させていく必要があります。そして、校長には教師一人一人が主体性を発揮し、自らの資質を向上させていけるよう教師の学びの伴走者として、ファシリテートしていく役割が求められます。さらに、改正案によると、これからの時代の校長には従来求められていた「教育者としての資質」「的確な判断力、決断力、交渉力、危機管理等のマネジメント能力」の他に、「様々なデータや学校が置かれた内外環境に関する情報について収集・整理・分析し共有すること（アセスメント）」、「学校内外の関係者の相互作用により学校の教育力を最大化していくこと（ファシリテーション）」が求められています。目指す学校の姿である教育目標に照らして、学校の状況を分析し、その差異を解決すべき経営課題としてスクールプランを設定する、さらには教員一人一人の良さを引き出し、同僚性を高めながら学校運営能力を最大限に発揮させる、これこそがこれからの校長に求められる最大の責務なのでしょう。

こうやって書くと、明日からの学校運営に不安を抱かれる校長先生もおられるかもしれません。校長はある意味孤独です。最後は自分一人の責任で決断を下さなければなりません。そんな時に心の拠り所となるのが、校長会だと思います。独善的な学校経営に陥らないようにするため、アセスメントやファシリテーションの力を確かなものにするためにも、校長会における対話的な学び合いが重要となります。

そういった意味では、今年度、３年ぶりに坂井地区で対面形式での研究大会が開かれたことは、大変大きな成果でした。提案者や司会者、運営担当者の方々のおかげで、各分科会を通して情報を共有し、ともに学び、互いを磨き合う場が持てました。関係者の方々に、この紙面を借りまして改めてお礼申し上げます。そして、これからも校長会が「学び続ける校長」を支える組織として、一致団結して進んでいくことを願っています。

最後になりましたが、「會報」の発行に際し、ご協力いただいた関係各位、並びに編集広報委員の皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

第74回福井県小学校長教育研究坂井大会
教育長挨拶概要

福井県教育委員会
教育長　豊　北　欽　一

本日、１８３名の小学校長の皆様にご参加いただき、第７４回福井県小学校長教育研究坂井大会が開催されること、心からお祝い申し上げます。

来週以降、学校再開とともに、小学生の感染者が急増することが危惧されます。保護者や児童に対し、感染対策を再認識してもらうよう働きかけをお願いします。

【今年の全国学力・学習状況調査】

全国学力・学習状況調査については、全国トップクラスを維持はしていますが、全国平均より低い小学校が４６校と増加しています。全国学調の順位にこだわることは私の本意ではありませんが、学調がある以上は、「引き出す教育・楽しむ教育」を中心に据えながらも、「わかる喜び」というものを、子どもに感じさせることも忘れないでほしいと思います。

【不登校対策】

令和３年度の公立小中学校の不登校の児童生徒数がこの秋に文科省から発表されますが、全国の増加数が去年の３．３倍で、令和３年度は小中合わせて前年度の８５４人から１０７１人に大きく増えていると聞いています。学習がわからないことを理由に休む子も増えています。日頃から声かけやチェックを行いながら、自校の状況を把握し、教員全体で考えながら、改善に向けての対策を行っていただきたい。

【働き方改革】

今年、働き方改革の観点から教科担任制を拡充しました。結果、空き時間が増えて現場からは好評です。小学校の働き方改革として文科省に求めることは、多様な児童と向き合うためにも、「空き時間があって、ゆとりが感じられるような教員配置」でないかと考えます。

就任してから毎年行っている県教委指導主事との意見交換の中で、①通知表所見の廃止、②校則を見直して管理的な生徒指導の時間の削減、③校務分掌や担当業務の見える化、④職員会議の見直し⑤オンラインによる保護者面談の実施など、教員の中の「当たり前」の見直しや昭和の価値観からの脱却といった意見がありました。

私からは、次の３つのことを提案します。一つ目に、児童生徒との連絡ノートの簡素化、二つ目に、清掃の時間や学校行事等、児童生徒に任せるところは任せ、先生はサポート役に徹していくこと、三つ目は、近隣の小学校との協力による、行事等の企画運営の負担軽減です。各校でこうした取り組みについて、話し合ってください。

働き方改革は周りの様子を見て行うものでも、市町教委の判断を仰ぐものでもありません。校長がリーダーシップを発揮して、教員の意見も十分に聞いたうえで、思い切った改革を進めてください。

【俳句コンクール】

５月１４日、夏井いつきさんに「俳句を通した楽しい学校づくり」の講演をしていただきました。夏井さんが講演の中で話された、「できない理由を見つけるのが先生の得意技。」とか、「褒める気があれば、どんな句でも褒められる。」という言葉が印象的に残っています。講演後にいただいた色紙には、「楽しくなければ、俳句じゃない。」と書かれていました。俳句コンクールへのたくさんの応募をお待ちしています。

【絵を通して「引き出す教育･楽しむ教育」を進めるには】

昨年も今年も、「ふくい中学生アートリンピック展」を見て、中学生の力強い作品に驚きました。野村重存氏が書かれた「水彩画の手ほどき」という本には、各ページに動画のＱＲコードがあって、水彩画の描き方が基本的なことから事例をもとに学べるようになっています。各校で購入して授業等で活用してみてください。そして、絵を書くことが好きな子どもたちを育ててください。

【個別最適学びと協働的な学び】

上智大学教授の奈須正裕氏の「個別最適な学びと協働的な学び」という本には、山形県の小学校で実践された、「仲間と教師で創る授業」に加え、「自学・自習」「マイプラン学習」「フリースタイルプロジェクト」という、子どもたちが自立的に学び進める三種類の学習について紹介されています。興味があったら読んでみてください。

【図鑑を活用した学び合い】

教育評論家の親野智可等さんの「頭がいい子の図鑑の読み方・使い方」という本には、「図鑑は、勉強嫌いな子でも、勉強好きになるツールで、広く・深い知識が身につき、考える力が育つ。図鑑で、どんなことにも前向きに取り組む心を育む。」ということが書かれています。学校図書館にある図鑑を活用し、総合的な学習の時間等にタブレットＰＣを使い「クイズ大会」を行ってはどうでしょう。全員が作ったクイズを全員で解答し、出題した児童は正解の理由やコメントを説明するような、子ども同士で学び合うことも面白いのではと思います。

本大会は「自ら未来を拓き、ともに生きる豊かな社会を創る日本人の育成を目指す小学校教育の推進」を主題とし、８分科会に分かれて協議がなされると聞いています。 活発な協議が繰り広げられる中で多くの学びが得られることを期待します。

終わりに、今大会の成功と福井県小学校長会のますますのご発展、そして皆様方のご活躍、ご健勝をご祈念申し上げまして、お祝いの言葉といたします。

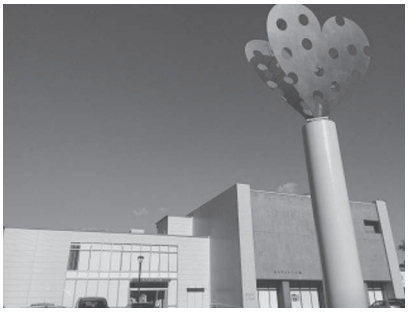
時流潮流

クリヨウジからのメッセージ

鯖江市まなべの館
館長　井　上　裕　子

鯖江市まなべの館は、日本海側随一のつつじの名所である西山公園の北側に位置する。2010年に鯖江市資料館から鯖江市まなべの館へリニューアルした。鯖江市域の考古資料を紹介する『考古学の部屋』、鯖江藩主間部家関連の資料を展示する『まなべの部屋』、鯖江で生まれ育った元禄三大文豪で浄瑠璃作家の近松門左衛門について学べる『近松の部屋』、郷土の芸術家の作品を紹介する『久里洋二の部屋』、『西山真一の部屋』があり、郷土の歴史、芸術文化について楽しく“学ぶ”ことができる総合博物館である。

リニューアルオープンに際して、鯖江市出身でアニメーション、イラスト、漫画、絵画、絵本、小説などの執筆活動まで多彩な才能を持つクリヨウジ氏（＊2016年にカタカナ表記に改名）が名誉館長に就任した。館の正面にはクリヨウジデザインのモニュメント「ハートの木」があり、シンボルツリーとして来館者を出迎える。これは市制60周年を記念し、クリ氏にデザインを依頼したもので、クリ氏のふるさと鯖江への想いが詰まったまなべの館のシンボルモニュメントである。



「ハートの木」(2014年)

制作コメント
鯖江をイメージするものって考えたけど、メガネや漆、繊維はもう描きつくした感じだね。
やっぱり、ハート、愛、LOVE
まち、ふるさとを愛している。
気持ちだね！

この「ハートの木」に、次々と花が咲き、実がなり、種が飛び、街中がハートの木でいっぱいになるように、鯖江を愛する人が増えるようにというクリ氏のふるさとを愛する気持ちが込められたデザインになっている。夜になると、鯖江の夜空にポッとハートが浮かびあがる。

クリ氏は1928年4月に鯖江市旭町（旧東小路町）で生まれ、19歳までの間を鯖江で過ごしている。当時は、まなべの館周辺にも山や沼地があり、野原が広がっていたという。西山公園には花見、草相撲、虫捕り、写生大会、花火など、小さい頃の想い出がいっぱい詰まっているのだとよく話される。豊かな自然の風景、北陸特有の灰色の空、野山で昆虫や植物に触れあった体験は、クリ氏独特のユーモアのある題材や鮮やかな色彩遣いなど、後の作品に生きている。また、2018年から3年の月日をかけて制作された「ふるさと鯖江百景」の作品からもふるさとへの想いが溢れんばかりに感じられる。おそらく、クリ氏にとってふるさとは心の原点であり、旧制中学卒業後すぐに上京したため、ふるさとに対する思い入れが人一倍強いのだろう。一見、批判的にもとれる言葉の裏にも、ふるさとを大切に思う気持ちが見え隠れする。

小さい頃から絵を描くのが好きだったクリ氏は、京都の美術学校への進学を希望するが親に反対され、1950年に漫画家を志して上京し、横山泰三氏に師事する。横山氏は痛烈に政治、社会風刺をした漫画家で、その作品に身体が震える程感銘を受けたという。当初、共同通信社の画信部に嘱託として勤め、時代風刺のコマ漫画を描き始め、後に、文化学院美術科に入学し、本格的にデッサン力を磨き公募展に出品し始める。1958年には久里洋二漫画実験工房を設立し、この時自費出版した「久里洋二漫画集」で第4回文藝春秋漫画賞を受賞、油彩画「鎌倉カーニバル」では二科展特選となり、一躍時の人となる。そして、柳原良平、真鍋博と共に「アニメーション三人の会」を結成して、日本の前衛芸術の聖地と言われる草月アートセンターで実験アニメーションの制作に乗り出していくことになる。オノヨーコや三宅一生などの新しい芸術分野の開拓を目指すアーティストたちと交友したこの時代は、日本の美術史に大きな影響を与えたと考えられる。

「アニメは言葉を必要としない国際語である。」クリ氏はユーモラスで独創的な実験アニメーションで、戦後の日本に新境地を開いていく。1962年、檻の中の人間の男女の姿態をシニカルに描いた「人間動物園」が、各国の11の映画祭で賞を総なめにし、「LOVE」、「殺人狂時代」、「二匹のサンマ」なども国際的な映画祭で高い評価を得て、クリヨウジの名を世界的なものにしていった。この実験アニメーションの他にも日本テレビの深夜番組「11PM」では、18年間にわたり、週一回、計800本のアニメーションを制作し、NHKの「みんなのうた」や「ひょっこりひょうたん島」のオープニングアニメーションも手掛け、戦後日本のアニメーション界をけん引していったのである。

当時を振り返り、「11PMではアシスタントなしで100から200枚のセル画を1日で描き、木曜日に撮影、編集して土曜日に現像所に持っていく毎日で、自転車操業だった。当初はライティングも確立しておらず、撮影の失敗も多かった。まさに実験だった」と語っている。

まだ日本にアニメーションという言葉がなかった頃から実験制作を始め、1960年代に、日本のアートシーンにアニメーションを持ち込み映画祭を主宰。自身も

国際的な映画祭で数多く受賞し、日本と海外を繋ぎ、文字通り日本のアートアニメーション分野を切り開き、激動の時代を駆け抜けていったのである。

1980年以降、幼いころの夢だった画家としての道を選択する。本格的に画業に専念し、数えきれないほどの作品を制作し、ニューヨーク近代美術館、パリ市立近代美術館、山梨県立美術館など国内外で作品を発表した。2016年には88歳で描き下ろした500ページの大作漫画『クレージーマンガ』を発表。風刺漫画としての原点回帰、鬼才クリヨウジの存在を示した渾身の一冊を刊行し、この作品で日本漫画家協会賞・大賞を受賞する。さらに、2018年、創立当初より関わってきた「広島アニメーションフェスティバル」国際名誉会長に就任。現在も精力的な作家活動を行っている。

このような長年に渡る目覚ましい作家活動の中、まなべの館主催の企画展や教育普及事業にあわせて帰郷している。近年では、2017年６月にクリ氏の母校である惜陰小学校で開催した「クリヨウジアーツクルーズin惜陰小学校」が記憶に新しい。本事業は、子どもたちに国内外で活躍する芸術家と触れあう機会を提供することにより、地域文化の素晴らしさを感じ、郷土を愛する心や創造性豊かな人間性を育み、次世代の人材育成に努めることを目的としている。また、子どもたちにとって、将来への夢や希望を大きく抱くことのできる場となることを願い開催したものである。この時は、第46回日本漫画家協会賞大賞受賞を記念しての帰郷の機会に、アニメーションをつくる楽しさやコツを学ぶ芸術体験学習を行った。

クリヨウジアーツクルーズ（2017年）

クリ氏は「動かないものに生命を与えるのがアニメーション。アイディア次第で魚も動くし、時計の針だって反対に回る。動く神様なんだ」と語り、クリ氏の指導の元、６年生79名が粘土を使った「クレイアニメ」の制作を行った。児童らは５人ずつのグループに分かれ、思い思いのストーリーを作成し、背景を描いた後、粘土で細かくパーツを作りながらコマ送り画像をタブレット端末のアプリを使って撮影、編集を行いアニメーション作品に仕上げていった。制作後の上映会では、端末上に20秒ほどに仕上がった映像が流れると、児童らは歓喜の声をあげた。クリ氏は「自分の好きなように自由に描きなさい」とアドバイスし、児童らは初めての作業に目を輝かせ夢中になって制作した。クリ氏にとっても母校での開催は、感慨深いことだったと思う。

クリヨウジアーツクルーズ（2010年）

クリ氏が講師を務めた「アーツクルーズ」事業で、もう１つ印象に残るものがある。当館がリニューアルオープンした年に、進徳小学校の全校児童280人を対象に大規模なアーツクルーズを開催した。低学年は自由課題「自由な作品をつくってみよう！」、高学年は広い体育館を会場に、アクリル絵の具で巨大キャンバスに絵を描く「大きなキャンバスに絵を描こう！」に挑戦した。４年生は「夢の中の生き物」、５年生は「夢を乗せて」、６年生は「宇宙を描く」をテーマに作品を制作した。各学年の教諭には事前にクラスで下絵を考えてもらうなど、忙しい中、調整準備に協力してもらった。また、使用する画材も本格的なものを選んだ。児童らは、縦1.6ｍ×横3.3ｍの大きなキャンバスを見るのもおそらく初めてであっただろうし、キャンバスにジェッソで下塗りすることやアクリル絵の具を使うことも初めてだったと思う。アクリル絵の具は普段授業で使う水彩絵の具と比べて発色がよく色が美しい。その美しさを感じるだけでも良い体験になったのではないかと思う。

「やっぱり絵は楽しんで描かなきゃだめ」、「もっと自由に描いて」というクリ氏の声掛けもあって、児童らは生き生きと制作に取り組んでいた。出来上がった作品は、子どもたちの自由な感覚を伸ばすクリ氏の指導で、色彩豊かで元気あふれる明るく楽しいものとなった。海の中の様々な生き物をのびのびとダイナミックに描いた作品、青空に浮かぶ大きな気球や空にかかる虹を描きキャンバスいっぱいに希望が溢れた作品、大胆な構図で宇宙に輝く太陽や地球、星を立体的に描いた作品など、子どもたちの持つ感性の豊かさ、潜在能力の素晴らしさには驚くばかりだった。

子どもたちの可能性は無限大である。子どもの頃から優れた芸術文化に触れることは、創造力や想像力、思考力、コミュニケーション能力などを養い、次の世代を担う人材を育てるのに重要なことだ。多種多様な体験が、芸術家やそれを支える人材の育成につながっていくのだと思う。また、ふるさとを大切に誇りに思う気持ちを持つことは、自分自身や周りを大切にし、心豊かで、たくましく生きる力を育んでいく。

現在、95歳のクリヨウジ氏。「僕は絵描きだから、生きているうちは絵を描きたい」と自身の信念を貫き通し、その創作意欲はまだまだ衰えることを知らない。「自分の好きなことをとことん突き詰めてほしい。失敗を恐れず、いろんなことに挑戦してほしい」。子どもたちへのメッセージを語るクリ氏の愛用の眼鏡に下がるトレードマークのメガネのストラップがキラリと揺れたのが印象に残る。

クリヨウジ氏　近景

「再読ふくい文学㉚」(2015.9.20) 福井新聞
「ふるさとエッセー」(1999.8.13) 福井新聞
「どんじり」久里洋二（1991）(株)いんなあとりっぷ社
久里洋二人間動物園　久里洋二　(1979)　美術出版社

退職校長の言葉

多くの出会いと多様な経験に感謝

福井市春山小学校長
森永　哲也

定年退職する年が、パンデミックの中だとは想像もつきませんでした。改めて、教育の本質を考えさせられました。感染拡大を予防するため、次々と各行事が削減されていく中で、残されたのは授業であったことです。学校は、教員と子どもたち、子どもたち同士の絆が一番大切だと気付きました。

私の教員人生は、社会科の臨時講師として坂井農業高校に赴任したときから始まりました。この時に柔道部の臨時コーチを務め、生徒と一緒に汗を流したものでした。

翌年、新採用として敦賀市の松原小学校に赴任し、先生方に助けられながら３年間勤めることができました。

地元美山に戻り、女子ミニバスの監督をすることになりました。武道をしてきた私にとっては、未知のスポーツであり審判の勉強をするなど大変でしたが、県大会で活躍する子どもたちの姿に感動したものでした。

その後、へき地複式校に異動し、初めて複式授業を担当しました。当初、教科書を２冊持っての授業に驚きました。平成８年には、東海北陸へき地教育研究大会が行われ、大会当日、20数名在籍の芦見小学校に350人の参観者が訪れました。公開授業は教室に参観者が入りきらず、別の教室でライブ中継することになりました。それでも、堂々と日頃の学習を見せる子どもたちの姿に、頼もしさを感じたものでした。今でも複式授業が好きで、後に赴任した日本人学校でも模範授業をみせることができました。

平成13年から３年間、ギリシャのアテネ日本人学校に勤務しました。日本という国を外からの視点で見ることができたことや今までの価値観や人生観を覆すようなできごとを体験することができて、とても良かったと思っています。

福井市教職員組合の書記長も経験し、選挙対策や連合福井の活動に参加し、教員とは別の世界をみることができました。管理職になってからは、順化小学校創立150周年事業や学校図書館などに携わり、今まで経験したことのなかった分野で仕事をすることができ、自分の視野を広げることができました。

定年を迎えるにあたり、お世話になった先生方をはじめ多くの方々との出会いが、私にとって大切な財産です。また、多様な経験を積んだことで人として成長できたと感謝しています。

最後に、校長先生方のご健康とこれからのご活躍をお祈り致します。

教職を楽しんで

福井市社西小学校長
北川　啓子

退職を迎える今年４月、「過ごす１日１日が最後になるから、どんなに毎日が感慨深い日々となるだろう」と予想していました。しかし、退職まであと４ヶ月となりましたが、相変わらず気ぜわしい毎日を一生懸命過ごしています。30年以上の経験を経ても、どんと構えていられない私の性分は、教員人生最後の１日まできっと変わらないことでしょう。

大学を卒業してすぐに大野市の中学校に赴任し、１年生を担任しました。初めての道徳の授業で、「ああ、私がこの生徒達に何を教えられるのだろう」と非常に戸惑ったことを、今でも鮮明に覚えています。専門外の音楽も担当し、当時は伴奏CDもなかったため、ピアノ伴奏や指導に困難を極め、職員室に戻っては泣いてしまい、周りの先生方によく慰められていました。２校目は出身中学校で、専門の保健体育を担当することができましたが、生徒指導困難校で緊張感あふれる毎日を過ごしました。４校目からはずっと小学校勤務で、担任をしました。真面目しか取り柄がない私が、教員としての心の軸としてもっていたのは、川端太平氏が「学校経営の理想と実際」に書かれた「熱誠と努力」という序文でした。38年間いろいろなことがありましたが、常に自分も学び続けることができたのは、ひとえに職場、保護者、児童生徒のみなさんの支えがあったからだと思います。

丹生郡の教頭時代は、学校整備の面で草刈り、芝刈り、除草剤散布、除雪機の使用など、人生初めての経験をしました。「教頭さんは学校のことをすべて知っていなければならない」と、校長先生自ら、これらの機械の使い方をしっかり教えてくださいました。身体的に辛かった記憶がありますが、「学校を預かる」立場の者として、この経験がよく生かされていることを感じています。校長先生がリーダーとして常に範を示されながら、温かく、時には厳しく管理職として育てていただきました。

そして、コロナ禍真っ只中の校長就任、未知のウィルスから学校を守るにはどうすればいいのか、不安なまま懸命に校長職を務めてきたというのが本音です。しかし、周りの方々と協力しながら、多くの問題を１つ１つ解決し、３年目の今年は、withコロナでいろいろな活動に挑戦することもできました。振り返れば楽しい充実した日々でした。校長は経営者として学校を動かす裁量権を持っています。校長としての責任は重く、日々の課題に一喜一憂しながらも乗り越えたときの達成感は深いです。

これからも自分の精一杯で教職を楽しみたいです。

感謝の想いを「学びを楽しむ」に繋いで

大野市阪谷小学校長
青木　知代

振り返れば、多くの方々に教えられ、支えられ、救われ、励まされてきました。まだ教員になる前の講師の時代から現在に至るまで、本当に数えきれない方々のお陰で今の自分があることを、心から感謝しています。その想いをどのようにしたら恩返しができるのか、ずっと考えてきました。ようやく辿り着いた答えは、教職員も子どもも「学びを楽しむ」学校を本気で創るということでした。

「学びを楽しむ」ことは、目指す「笑顔かがやく学校」に繋がると思いました。全校児童数２２名という小規模校の本校は、令和８年度から、富田小との再編が決まっていて終わりを迎えます。そのような中で、自分が決断したのは、子どもたちや教職員、保護者や地域の方々を寂しくさせないことでした。光が差したのは、大野市が進めている星空保護区認定に向けての取組でした。市や地域の関係機関と繋がり、学校全体で星空の「学びを楽しむ」ことを模索していきました。令和５年度には星空サミットが大野市で開かれます。学校も一丸となり、「星」つながりの活動や発信を進めてきました。ミテログや学校の公式インスタグラムでの魅力発信、阪谷の宝の地図、大雪対策マニュアル、ねんりん秋市、市内各々子ども食堂や施設への学校で育てた農産物の提供、プラネタリウム、荒島第一トンネル工事見学など、教師や子どもたちが、次々と外界への関りを求め、仕掛けていきます。少人数で多様な意見や考えの学びはどうしたものかと考えていたのが、大人と対等に接していく姿まで見られるようになり、心配していたことが嘘のようになってきました。

この先、星空保護区認定が叶った瞬間を共に喜び合いたい、学校の最後まで見届けたいという想いは募りますが、今の自分にできること、自分が本当にやらないといけないことは何かを本気で考え、実践してきたことは、自分が校長としての責務を全うしようとしてきたことの証と信じています。

数ある仕事の中で、自身が「学びを楽しむ」ことをできる仕事は、そう多くはないと思います。「教職は、教師自らが楽しむ仕事」と思っています。世の中が多様化して価値観が変化していき、ＩＣＴ時代を迎え、教育も大きく変化する時を迎えた今、「授業改革」や「業務改革」が求められています。私は教育の真の目的と考える「学びを楽しむ」ことを、子どもたちにも職員にも、最後の日まで伝えきっていこうと思います。

皆様、長年お世話になり、本当にありがとうございました。そしてこれからも阪谷小学校を、どうぞよろしくお願いいたします。

与えられたこともチャンス

勝山市立三室小学校長
牧野　憲昭

教職生活最後の夏休み、米寿を迎える元校長先生から電話がありました。「自然保護センターで、百武彗星やヘール・ボップ彗星の写真撮影と観察会に一緒に携わったときのエピソードを思い出してほしい」とのことでした。退職後の活動をまとめておられ、自分自身でも覚えておられたようですが、お話しする機会を得られたことに喜びを感じました。

私は多くの人の援助や助言を受け、活動を共にしたり、背中を押していただいたりして、ここまで来ることができました。特に小学校勤務時の「42.195kmリレーマラソン」「サッカー交流試合」「１日目は京都、奈良、琵琶湖に分かれる班別行動の修学旅行」など、「こんなことをやりたい」ということを認めていただき、協力もしていただいたことが思い出されます。

採用１年目の昭和60年４月９日、３泊４日の修学旅行に芦原温泉駅を出発しました。金津中です。引率者ではなく、生徒として同行した感じでした。開園２年目だった東京ディズニーランドで買ったミッキーマウスの財布を今も使っています（ミッキーマウスの絵柄は消えてしまいました）。２年後は担任としての３泊４日の修学旅行でした。その後、野向小、三室小、勝山南部中、勝山中部中、管理職として勝山南部中、成器西小、三室小に勤務しました。三室小と勝山南部中は母校で、合わせて22年（在籍は24年）も勤務させていただいたことは、とても幸せでした。30代前半の４年間自然保護センターに勤務しました。40歳のころ、兵庫教育大学大学院（総合学習系コース）に２年間行かせていただきました。これらは、その後の教員生活のアクセントになり、ものの見方・考え方に幅が出てきたように感じています。教員一筋もいいけれども、様々な体験を後輩には勧めたいです。自分から求めることがベターですが、与えられることも前向きに考えられるといいと思います。私は与えられたことがチャンスになり、感謝しています。

児童生徒を温かく見守り、時には厳しく接し、一人一人を大切にしてきました。徐々に、教職員や保護者にも同じように接せられるようになりました。中学生のころからずっと座右の銘にしている「人事を尽くして天命を待つ」を地道に実践することで、おのずとチャンスや幸せが巡ってきたように思います。コロナ禍も乗り越えて行けそうに思います。これからも与えられたことも誠実に取り組んでいきたいと思います。

2035年９月２日10時ころ、本州で148年ぶりに皆既日食が見られます。福井県では約98％欠ける部分日食が見られます。まだまだ先のことですが、楽しみにしています。

幸運に恵まれた教職人生

越前町立朝日小学校長
大川　伸介

今年もコロナ禍の影響を受けた１年でしたが、修学旅行では３年ぶりに関西を訪れることができました。事前に行った保護者説明会での焦点は、子どもが発熱したときの対応でした。それで思い出したのが、自分が初めて引率した修学旅行での出来事でした。

初日、京都に着いて昼食をとっていたとき、一人の男の子の顔に発疹が出ていることに気がつきました。近くの町医者に診てもらったところ、風疹と診断されました。医者からは、このまま同じバスに乗せることはできないと言われ、私とその子は、クラスの子どもたちが乗るバスを見送ることになりました。現地に家族が迎えに来るまでの時間を、ただ待つだけではかわいそうと思い、太秦映画村に行きました。チャンバラを見たり、みやげを買ったりして、ささやかながら修学旅行の思い出をつくることができました。その後、京都駅で母親に子どもを引き渡すと、急いで奈良に向かい、無事、本体に合流することができました。校長先生からは、予想以上に早く戻ってきたことを褒められました。携帯電話やネットがなかった時代にしては、我ながら上手くやったと思います。教師に成り立ての私は、事の深刻さを理解していなかった故に、焦る気持ちもなく対処できたのだと思います。

私は教師を目指して教師になったのではありません。元来、同じ場所に留まっているよりも移動する方を好むため、大学卒業後は外を回る仕事に就こうと漠然と考えていました。リクルートスーツに身を包んで就職活動を行い、内定も得ました。しかしながら、諸般の事情があって教員をすることにしました。ですから、教師を目指して教師になった先生は、自分には眩しく見えました。「どうして先生になったの？」という、子どもからの純真な質問に対して、どう答えるか戸惑うこともありました。

大したことの無い自覚と覚悟で始まった教職人生でしたが、これまで多くの人からやる気をもらい、支えられ、そして、幸運に恵まれて、ここまで務めることができました。英語教師としての中学校、管理職としての小学校、日本人学校や教育委員会など、行く先々で素晴らしい同僚や上司に恵まれ、充実した日々を送ることができました。言葉では言い尽くせない、感謝の気持ちで一杯です。

若い頃、「今日は機嫌が悪い？」と、子どもから言われたことがあります。私の顔色をうかがってそう言ったのでしょう。校長である今、「いつも笑顔で挨拶してくれてありがとう」と言われると、嬉しく思う一方で、あの頃の子どもたちへの申し訳ない気持ちが、頭をもたげるのです。

教員生活を振り返って

南越前町立湯尾小学校長
橿尾　政喜

昭和60年に新採用で越前町城崎北小学校から始まった教員生活ですが、令和４年度末をもって定年を迎えます。この38年間にたくさんの児童生徒、保護者、先生方、そして地域の方々との出会いがありました。その出会えた皆さんのおかげで無事職務を終え、退職の日を迎えることができ、感謝の気持ちでいっぱいです。

振り返れば、新採用から５年間お世話になった城崎北小学校は統合でなくなり、今では校舎は「かにミュージアム」に変わりました。城崎北小は小さい学校でしたが、子どもと休業中に学校に泊まったり、先生方とは放課後に学習指導について研修したり、食事に行ったり、魚を釣りに行ったりなど今では考えられないくらい密な時間を過ごしました。

次に、南条町の南条小学校への異動となりました。ここで４年間勤務した後、派遣社会教育主事として南条町教育委員会に６年もの間、勤務させていただきました。乳幼児から大人を対象とする社会教育に携わり、学校では経験できないことや行政の仕事にも触れることができました。この経験は、生涯学習の視点で学校を見つめ、学校の役割を再認識することができました。その後、越前市武生第一中学校に異動となりました。初めての中学校、大規模校の勤務で、とても緊張した日々を過ごしました。週５日制や総合的な学習などの変化もあり、６年間では夜の９時や10時過ぎに帰宅するような日々もありましたが、とても充実していました。平成18年から南越前町に戻り、河野中学校に７年、今庄小学校に３年間勤めました。両校とも教務主任として児童生徒の指導や学校運営に携わりました。

平成28年に河野小学校、平成30年には河野中学校の教頭として、平成31年には現在勤務している湯尾小学校の校長と、管理職としての勤務となりました。子どもたちが楽しく学校に通えるように、そして先生方も笑顔で登校できる学校づくりを目指してきました。

最後の３年間は、新型コロナウィルス感染拡大で、今までの学校生活はさらに大きく変わりました。手指の消毒をし、会話時にマスクをし、人との距離をとり、様々な学習活動が制限されました。また、タブレットが一人１台整備され、リモートで授業も行います。これらに対応するだけで疲れてしまいます。この状況の中、子どもたちは笑顔で活動し、成長してくれます。このことが私のエネルギーとなり、ここまで勤めることができたモチベーションだと再認識しました。

これから定年延長など先生方の働き方も変わりますが、今後も子どもたちの成長を応援し、仲間を手伝えるような生活を送りたいと願っています。

卒業の時

敦賀市立中郷小学校長
滝本　律子

本校の校長室の前には校庭があり、日々の子どもたちの活動がとてもよく見えます。暑い日も寒い日も、少しぐらいの雨ならば飛び出して来て走り回る姿にはいつも元気をもらいます。そして、その奥には小高い山を抱える岡山公園があり、季節ごとの美しさで私たちを楽しませています。今は紅葉真っ盛り、赤や黄色の鮮やかな葉が山を彩っています。この公園に桜が咲く頃、38年間の教職人生を終えるのだと思うと、１枚１枚をとても愛おしく感じます。

さて、私が校長の仕事の中でも最も大切なことの１つは、卒業証書の授与だと考えています。今年度の卒業生も加えると、校長として渡した卒業証書は、293枚。証書を授与する間、卒業生一人一人とのほんの数秒のやりとり。名前、一言コメント、そしておめでとうを伝え、証書を手渡す。目が合う瞬間、緊張の中にも笑顔を見せる子、目を潤ませている子、こちらも感極まる時があります。小学校を卒業しても、小学校のことを忘れるぐらい元気に過ごしてほしい、自分の人生を力強く切り拓いて生きてほしい、そう願います。

私は６年生を何度か担任させていただきました。子どもたちとはよく話し合い（もしかしたらバトル？）ました。６年生としてどんな自分になりたいか、どんな学級、どんな学校にしていきたいか、そのために何をしたいか、何をしなくてはならないか、などについて。上手くいくことばかりではもちろんありませんでしたが、精一杯頑張る子どもたちが大好きでした。そんな時、自分たちの取組を知って、掛けてくださる当時の校長先生の言葉がとても嬉しかったものでした。

自分が校長になった時、子どもたちの姿、先生たちの姿をしっかりと見て、それを認め励ますことを自身に誓いました。「人は、見ようと思わなければ見えてこない。聞こうと思わなければ聞こえてこない。」を心に留めて接しています。やんちゃで少し担任が手を焼いている子に友達の心配をする優しい面があったり、無愛想に見える子が用務員さんと話をしていたり…。そんなエピソードを担任と共有するのが楽しみです。忙しい中でも校庭に出て子どもたちと一緒に走り回る先生、根気強く言葉を掛け続ける先生、校内の事務作業がはかどるよう先を見越して準備をする事務さん、そんな姿を見るのも有り難くて、嬉しくて、楽しみでした。自分自身の健康にも気をつけて過ごし、３月、65名に卒業証書を渡し無事に送り出すことが今の私の大切な目標です。

最後に、今までお世話になった多くの方々にお礼申し上げます。ありがとうございました。また、皆様方のご健康と今後のご活躍をお祈りいたします。

「感謝・感謝・感謝・・・」

小浜市立今富小学校長
平井　和雄

＜38年間を振り返って＞　退職の年が、今年となり、新採用の頃が、本当に遠い昔のように思えます。そんな、今の私に言えることは、つきなみですが、本当に様々な方々への「感謝」しかありません。

＜子どもたちへの感謝＞　まず、私のようなものが教員生活を終えることができるのは、子どもたちがいてくれたからです。本当に「ありがとう」の言葉しかありません。私の教員生活は、今は閉校となった高浜町音海小中学校で中学１年生の男子５人の担任から始まりました。新採用で担任した子どもは、一生覚えていると言われますが、まさしくその通りで、ここでの子どもたちとの２年間は、今でも忘れられません。何も分からない私でしたが、子どもたちに助けられ、何とか過ごすことができました。その後、部活動では、私よりもずっと人間的に優れたキャプテンに助けられました。また、授業や学級では、若い頃は「個の確立」を目指し、年を重ねると「We are OK」から「公（おおやけ）」への貢献を目指す、といったことに子どもたちは、協力してくれました。

全ての子どもたちに最適な教育ができたとは、思えませんが、悩みながら、精一杯の教育をすることができました。子どもたちには、本当に感謝してもしきれません。

＜保護者･地域の方への感謝＞　教員生活での失敗は、数知れませんが。保護者の方に「学級のお便りに、子どものよいことも書いてくれや」と言われたことが、全てを物語っていると思っています。これ以外にも、直接的・間接的に保護者や地域の方からの支援を頂いたお陰で、今年を迎えることができました。本当に感謝です。

＜同僚への感謝＞　そして、何よりも感謝の気持ちを伝えたい方は、同僚の先生方です。若い頃は、正しいことは､一つだと信じ､部活でも授業でも研究でも様々なことを行いました｡そのような私を同僚の先生方は、温かく、また、厳しくご指導下さいました。今は、そのありがたさを痛切に感じております。特に、兵庫教育大学大学院で２年間研究をさせて頂いた時、教授に大変失礼な修士論文の下書きを提出した際に受けた指導は、研究以前の大事なことを教えて頂きました。このようなエピソードは、数えきれませんが、同僚の先生方のお陰で退職を迎えることができたと思っております。本当にありがとうございました。

＜家族への感謝＞　また、土・日もなく毎日遅くまで学校で勤務しているのが当然の時代に、私を公私ともに支えてくれた家族へは、どれほど感謝してもしきれません。本当に、感謝・感謝・感謝です。

＜おわりに＞　退職が教職の終りではない時代になっていますが、皆様がこの大きな節目を心身共に元気に迎えることができますように、これからの益々のご活躍を祈念しております。今まで、ありがとうございました。

校　長　講　話

「うかつあやまり」

永平寺町松岡小学校長
森下　昇一

先月は松岡小学校「目指す児童像」の４つの中で、自分は特にどれを頑張るかについて聞きました。

ま→「まじめな心を持つ子」
つ→「つかんで学びとる子」
お→「おもいやりのある子」
か→「からだをきたえる子」

この中で、「おもいやりのある子」に手を挙げた人が多かったので、今日はそのことに関係する話をしたいと思います。

「うかつあやまり」というお話です。

「うかつ」というのは、「うっかり」ということです。「うっかりして人の足を踏んでしまった。」という時などの「うっかり」です。

私たちは、ついうっかりして人に迷惑をかけてしまう時がありますが、狭いところで人にうっかりぶつかってしまったり、机と机の間を通っていてうっかり友達の筆箱を落としてしまったり、といろいろあります。その時に、「あっ、ごめんなさい。」とか「すみません。」と謝るのは、みなさんは普通にできますよね。うっかりして迷惑をかけたのですから、謝るのは当たり前だと思いますね。

ところが、「うかつあやまり」というのは、やってしまった人だけでなく、やられた人も謝る、ということなのです。

なぜかというと、足を踏まれたのは、踏んでしまった人が悪いだけでなくて、自分も足を出していたから悪いのだ、だから「ごめんなさい」。筆箱が落ちたのは、落とした人も悪いけど、机からはみ出すように筆箱を置いていた自分も悪かったのだ。友達が、床に落ちていた自分のプリントを踏んだのは、自分もプリントを早く拾わずにそのままにしていたからいけなかったのだ。

相手も自分もどちらもうっかりしていたから・・・だから、どちらも「ごめんなさい」。それが「うかつあやまり」です。(講和あいさつ辞典 小学校　参照)

これができたら、友達とケンカになったり、いじめたりしなくなると思いませんか。「うかつあやまり」ができる時があったら、是非やってみてください。

６月も、自分が頑張りたい「目指す児童像」を意識して、過ごしてほしいと思います。これで６月のお話を終わります。

種から学ぶ

越前町立常磐小学校長
菅野　由美

秋らしくなりました。何をするにも気持ちのよい季節ですね。先日、とてもよいお天気だったので、家の近くで草刈りをしました。１時間ほどで作業を終えると、足のあたりがちくちくします。見てみると、ズボンにこんな物がいくつもひっついていました。オナモミです。皆さんも見たことがあると思います。とげがたくさんついています。なぜ、こんな形をしているのでしょうか。

インターネットで調べてみました。とげのついたものは、オナモミの実で、中に種が入っているそうです。オナモミは、とげで動物の毛や人の洋服にひっつき、中の種を色々な場所に運んでもらい、仲間を増やすのだそうです。私はオナモミの種を運ぶのを手伝ったということですね。他にもアメリカセンダングサも、とげとげしたところを動物の毛にひっかけて種を遠くに運んでもらうそうです。

さらに調べてみると、種を運ぶ方法は植物によって色々あるそうです。風で運んでもらう種があります。綿毛がついたタンポポの種は、皆さんも見たことがあると思います。これは、２枚の羽のような物がついていて、くるくるまわりながら飛ぶカエデの種です。フウセンカズラは、実が風でころころ運ばれ、中の種も遠くに運ばれます。

アリに運んでもらう種もあります。スミレは、種にアリの餌を付けておき、巣まで運んでもらいます。アリが巣の中で、餌の部分を食べてしまうと種が残ります。そして、そこから芽を出すそうです。

鳥に種を飲み込んでもらって運ばれる種もあります。サルトリイバラ、フユイチゴなどは赤い実をつけて鳥を誘います。鳥は実といっしょに種を飲み込みます。飲み込まれると果肉は消化されてしまいますが、種は消化されないようにできているそうです。種はうんちといっしょに出され、新しい場所で芽を出すのです。植物は自分で動くことができないので、色々な方法を考えて、種を運んでもらうのです。

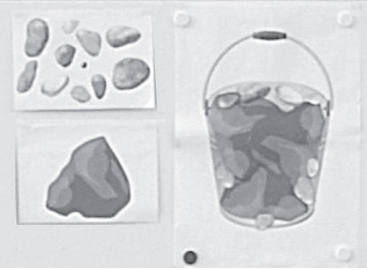
皆さんも、生活の中で、あるいは学習の中で、不思議に思うこと、疑問に思うことがあると思います。学びにはそれがとても大切です。一つの不思議を調べていくと、たくさんの「なるほど」に出会います。それが学びの面白さです。そして、また新しい「不思議」に出会い、学びが深まり、広がっていきます。皆さんも、日々、不思議や疑問を大切にして、自分から調べていく学びを進めてほしいと思います。

夏休みの過ごし方をイメージしよう

美浜町立美浜東小学校長
小島　義和

いくつか質問をしますから考えながら聞きましょう。

ここに透明なバケツがあります。このバケツに岩を入れます。いっぱいになりました。もう何も入りませんか？…そうです、すき間に石が入りますね。いっぱいになりました。もう何も入りませんね？…そう、砂なら入りますね。どんどん入れます。もう何も入りませんね？…まだ水なら入ります。これでいっぱいになりました。さすがにもう何も入りません。さて、もう一度バケツをからにします。今度は砂を入れます、残ったところに小石を入れます…いっぱいになりました。ここに岩は入りますか？水は何とか入るけど、岩どころか、もう石も入らないよね。入れる順番が逆だと、大きいものは入らなくなるのです。



このバケツは39日の「夏休み」です。そして、石の大きさは、何かをするときに必要な時間です。だから「岩」は何日もかけないとできない、「自由研究」とか「工作」、「宿題」もそうかもしれませんね。「石」は何時間もかかってしまう、「読書」や「作文」、ピアノやダンスの「おけいこ」、「映画を見る」のもこれに入りますね。「趣味」としましょう。そして「睡眠」も８時間、９時間ほしいから、結構大きい石です。そして、「砂」は、本当はすぐにでも切り上げられるものです。「ゲーム」とか、「YouTube」とか、「何してた？」ということもなく「ボーッと」しているなんていうのも入ります。最後に「水」は生きるために必要なものです。ご飯を食べたり、お水を飲んだり、トイレに行ったりという、絶対に必要な時間です。「睡眠」もこの仲間ですが、かなり大きくて大切なので「石」に入れました。

この「砂」や「小石」を「バケツは大きいから」と、ダラダラ、どんどんと入れていると、気がついたら「入れなきゃいけないものが入らない！」となるのです。今日帰ったら、自分にとっての「大きな石」は何かな？大きさは？と、考えて、書き出してみてください。それが「39日」というバケツにゆとりを持って入るように、過ごし方の作戦を立ててくださいね。

「学校大好き　雲浜大好き　小浜大好き」

小浜市立雲浜小学校長
竹中　一道

今年の雲浜小学校のキャッチフレーズが決まりました。この言葉は先生方もみなさんにもぜひ合言葉にして欲しいと思います。私がいつも言っていますが学校は楽しいところでないといけません。毎日、先生方もみなさんも学校に行きたいと思う気持ちが、全ての活動の原動力となります。ではみなさんに質問です。「楽しい学校とは、どんな学校でしょうか。」自分の思いどおりになる学校ですか。つらいことが全くない学校ですか。それとも学習や宿題の全くない学校でしょうか。

私は「楽しい学校」とは「わかる」「つながる」「のびる」ことのできる場所だと思っています。自分さえよければという考えではなくて、自分と違う考えやその考えを持つ人も大切にすることのできる「だれもが大切にされる学校」だときっとみんなは楽しいと感じると思うのです。また、がんばりを認めてくれる学級には、いつまでも居たいとは思いませんか。ぜひみなさんの学級がどうしたら楽しい学級になるのかをよく考えてみてください。

さて、次に私達の雲浜小学校についてです。学校のある雲浜地区には昔小浜城というお城のもとに町ができ、これまで多くの日本を代表する人物を世に出してきています。梅田雲浜、山川登美子、杉田玄白、山口嘉七、中川淳庵…などといった人たちです。すでに社会科で学んだ人たちもいると思います。理想の社会を実現するためにそれぞれの人が努力して今の時代を作ってくれたのです。

また、これまで本校では高学年で鯖街道踏破体験活動を行ってきました。校長先生もこれまでは地域の自然を使っての体力づくりのために行っているのかなと思っていましたが、詳しく調べてみると昔小浜の町を治めていたお殿様や家来たちが京都のお屋敷とを結ぶために鯖街道を大切に保護していたことも分かってきたのです。今みたいにトラックや電車はありませんでしたから、山の中を安全に歩いていける道が都とつながる唯一の方法だったのですね。

雲浜地区、小浜城、小浜の町、鯖街道…と考えると本校と鯖街道もとても関係があるのだなと分かったのです。

このようにみなさんの通っている学校や地域は素晴らしい「人財」(人という財産)に恵まれた地域です。今でも多くの方がいろいろな仕事で地域を支えてくださっています。ぜひそれぞれの学年で考えて「人財」から学ぶ機会を作ってほしいですね。そして、自分が学んだことや考えた事、さらに疑問をもって調べた事等をどんどん多くの人に発信して欲しいと校長先生は思っています。そんな故郷に誇りを持ち、人とのつながりを大切にした学びをぜひ行ってほしいです。１年の終わりにもう一度みなさんに聞きますね。「学校大好き　雲浜大好き　小浜大好き」だったかと。

令和４年度　専門委員会活動報告

人事行財政対策委員会

本委員会では、学校教育・学校経営の課題解決に向け、小・中学校が一体となって教育諸条件の整備充実のため、学校現場と行政側が意思の疎通を図ることを目的として、「県教育長と語る会」を実施した。実施に当たっては、県教委に対する各地区校長会からの意見・要望等を集約し、懇談の話題とした。

■県教育長と語る会　８／24（水）

県教委から豊北教育長をはじめ８名、県小中学校長会から15名が参加し、次の２つのテーマについて校長会から提案を行った。

（１）学校における働き方改革について

〇授業時数の見直しと教科担任制の拡充【小学校】

・授業実施週数を40週として時数を割り振り、週当たりの時数を減らす。

・質の高い教育の実施と担任の空き時間創出のため、教科担任加配を拡充する。

〇部活動の地域移行【中学校】

・兼業と超過勤務の扱いについて、速やかに情報を提供する。

・文化部の地域移行を進める。

・協議会とコーディネーターを導入する。

〇多様な人材獲得と働きやすい制度づくり

・再任用や再雇用、講師採用など、能力や本人の希望に適した柔軟な採用をする。

・正規定数増や任期付き採用などと併せて、講師経験者や市町推薦の枠を設ける。

（２）これからの教職員研修の在り方について

〇研修の方法

・対面集合型だけでなく、オンデマンド型、同時双方型など、効果的･効率的な方法を組み合わせる。

・新採用教員に対するOJTの時間創出のため、若手研修の期間を広げて年間の研修数、１日の研修時間を縮減する。

・研修の振り返りやアンケートを提出することにより、自動的に研修履歴に反映されるようなシステムを構築する。

・同一校の教員のみに限らないチームとしての研修を奨励する。

討議の中で県教委からは、校長会の提案・意見を尊重する前向きな回答や意見を得ることができた。また教育長からは、人材確保の観点から、「今後どのようにして学校現場を魅力あるものにしていくか、校長が中心となって教職員と話し合いながら学校を変えていってほしい」という要望が述べられた。

（文責：福井市羽生小学校長　　林　雅樹）

調査研究委員会

調査研究委員会では､「子どもたちの『夢と希望』『ふくい愛』を育む教育を推進するための校長の役割」をテーマに、今日的な学校教育の課題、学校経営上の諸問題や社会の変化に即応した学校の取組について、調査研究を行った。

１　調査対象　全小学校184校［国立１､市町立183］

２　調査期間　令和４年６月10日～７月１日

３　調査項目　全連小調査項目の抜粋と会員からの要望

４　調査内容について　（詳細は報告書を参照）

調査の結果、学習指導要領に基づいた児童生徒の資質・能力の育成に向けて、ICTを最大限に活用し、これまで以上に「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に取り組もうとする学校の姿が浮かび上がった。「授業改善」を重視している学校が昨年度よりも増加しており、またその「授業改善が課題である」と答えた学校も増加している。各学校で授業改善を目指し、その質的向上を図っていることが窺える。

県民の信託に答える小学校教育の在り方については、課題として「教員の多忙化解消のための校務改善への取組」が高い数値を示した。教員の多忙化解消に向けて様々な面で改善が図られているが、学校現場は依然として新たな教育課題に奔走する日々であり、各校長は試行錯誤していることが窺える。

教育力の維持・向上にとって不可欠な人材育成においては、管理職の意識は「教員相互で学び合う場の設定」へと変わってきており、互いに学び合い、高め合おうという雰囲気作りに取り組んでいることがわかる。若手教員の育成については、効果的で実効性のあるOJTをどのように実践していくのか、校長がビジョンを示すことが求められているようである。

新型コロナウイルスが完全に消滅することはなく、今後もウィズコロナという視点から教育活動を進めていく必要があるが、各学校では感染対策をしながら、従来の活動に戻しつつある。多くの学校が、この機会に学校行事の在り方を見直したり、オンライン授業を推進したりした。しかし、地域の理解を得ることの難しさ、オンライン授業実施のための教員の負担増、子どものマスクの着脱の指導等、課題も見えてきた。今後も関係機関と連絡をとりながら、これらの課題に取り組む必要がある。

最後に、アンケートに協力いただいた県下小学校長をはじめ、調査研究委員の皆様に、心より感謝申し上げる。

（文責：福井市明新小学校長　田中　佳之）

教育研究委員会

１　活動の報告

第74回福井県小学校長教育研究坂井大会に向けて、研究副主題を「夢と希望の実現に向けて主体的・協働的に学び　未来を生き抜く力を育成する学校経営」と設定し、校長の役割や指導等の在り方について実践的な研究を推進した。３年ぶりの参集型の研究大会を開催することができ、直接意見交換ができる貴重な機会となった。

２　主な活動内容

（１）第１回教育研究専門委員会
期日：４月19日（火）会場：ユー・アイふくい
〇役員選出、年間活動方針、年間行事計画について
〇令和４年度・５年度各研究大会について
〇県小学校長教育研究坂井大会の概要について

（２）第２回教育研究専門委員会
期日：６月10日（金）会場：ハートピア春江
〇県小学校長教育研究坂井大会の打合せ
全体会、分科会の日程と当日の協力体制確認
全体会会場、控室等の下見

（３）第74回福井県小学校長教育研究坂井大会
期日：８月25日（木）
会場：ハートピア春江、春江中学校
〔分科会発表者〕

①学校経営	福井市文殊小	水野	涼子校長
②知性・創造性	おおい町立名田庄小	鹿谷	佳則校長
③人間性・健康	勝山市立野向小	田邊	千智校長
④人材育成	越前市南中山小	服部	美穂校長
⑤危機管理	敦賀市立敦賀西小	栗城	信市校長
⑥社会形成能力	福井市湊小	山本	智宏校長
⑦自立と共生	鯖江市片上小	五十嵐靖浩校長	
③連携・協働	坂井市立春江西小	井口	敬雄校長

（４）第57回東海・北陸地区連合小学校長会教育研究静岡大会
期日：10月27日（木）28日（金）
〔分科会発表者〕
第２分科会　福井市文殊小　水野 涼子校長
第６分科会　勝山市立野向小　田邊 千智校長

（５）第３回教育研究専門委員会
期日：令和５年２月２日（木）
会場：教育センター
〇第75回県小学校長教育研究奥越大会について
〇令和５年度各研究大会について
（文責：坂井市立磯部小学校長　多田　敏明）

編集広報委員会

１　活動の報告

「會報」を編集・発行し、県小学校長会及び各専門委員会の活動内容を全会員に知らせるとともに、令和４年度の県小学校長会の主な歩みを記録した。また、各界の先輩諸氏の提言などを受けて、校長としての指導力の向上や今日的課題の把握に資するとともに、会員相互の意見交換の場を提供する情報連絡誌としての役も果たすよう努めた。

２　活動内容

（１）「會報」の編集・発行（Ａ４判、年２回発刊）
①第115号の主な内容
・巻頭言、知事講話、県小学校長会の活動方針、各専門委員会活動計画、校長講話、新任校長の抱負
②第116号の主な内容
・巻頭言、県教育長挨拶、時流潮流、退職校長の言葉、校長講話、各専門委員会活動報告
③委員会の活動内容
〇第１回編集広報委員会（4/19 県教育センター）
正副委員長選出、活動方針確認、年間計画確認
〇第２回編集広報委員会（4/22　オンライン）
第115号の編集計画、年間計画の再確認
〇第１回編集企画会議（7/28 オンライン）
正副委員長による、第115号の最終校正
〇第３回編集広報委員会（8/25 ハートピア春江）
第115号の発行、配付・発送作業、振り返り、
第116号の編集計画、各郡市原稿割当確認
全連小関連依頼
〇第２回編集企画会議（12/ 20　オンライン）
正副委員長による、第116号の最終校正
〇第４回編集広報委員会（1/ 20　オンライン）
第116号の発行、配付・発送作業、振り返り

（２）全連小広報担当者連絡協議会
（6/30 KKRホテル東京）

（３）全連小編集「小学校時報」等の原稿依頼、原稿執筆
〇「小学校時報」掲載

・６月号	鯖江市豊小	伊藤　誠道	前校長
・８月号	あわら市芦原小	中嶋　英雄	校長
・10月号	若狭町立気山小	三好万里子	校長
・１月号	福井市日之出小	田中　範継	校長
・２月号	越前市北新庄小	宮本　賢司	校長

〇全連小ＨＰ
「特色ある学校紹介」Ｒ３～Ｒ５年度掲載校継続
順化小、成器南小、北潟小、織田小、岡本小、敦賀西小、おおい町立本郷小
「特色ある研究校便覧」Ｒ４-Ｒ５年度掲載校継続
明新小、本荘小、味真野小、美浜西小

（４）福井県小学校長会ＨＰ更新（６月、11月、２月）
（５）依頼原稿の調整（随時）
（６）その他必要な広報活動
（文責：福井市美山啓明小学校長　石堂　和代）

編集後記　「會報」１１６号発行に当たり、鯖江市まなべの館 館長　井上 裕子 様には、お忙しい中玉稿を賜りました。退職校長の言葉や校長講話等、会員の皆様からも経験に基づいた貴重な原稿をお寄せいただき、今号も充実した内容とすることができました。皆々様には心より厚くお礼申し上げます。コロナ禍、強まった会員のネットワークを生かし、より一層学校運営に力量を発揮されますことを祈念いたします。「會報」やホームページが、その一助となりましたら幸いです。